



3月10日 犯罪ゼロの日 街頭啓発活動



2月27日 沢地小学校休み時間



3月6日 箱根松並木のコモ取り外し



3月1日 大場川ウオーク&ジョグコース
新設お披露目イベント



3月11日 ICTボランティアによる北中学校SNS勉強会



2月28日 春季火災予防運動



3月3日 伊豆箱根バス AED 搭載救急救命講習会



2月25日 日没の大通り



3月11日 1人3日分非常食の備えを忘れずに



2月26日 中郷西中学校の授業風景

三島宿 問屋場と問屋

四月十二日(土)より開催予定の企画展「三島宿を支えた人々」

三島問屋場・町役場文書から」に合わせ、江戸時代、三島宿の中心的な施設であった問屋場に残された資料を紹介します。

江戸時代の東海道には五十三の宿場があり、三島宿もその内のひとつとして賑わいました。江戸時代には庶民の旅も盛んでしたが、公的な人・モノの輸送手段と宿泊場所の提供が宿場の第一の役割でした。宿泊機能は公家、大名などが泊まった本陣や旅籠が担い、輸送のための人や馬を周辺の村々の住人が提供しました。

この人馬が集まったのが問屋場で、隣の宿場から送られてきた荷物などを受取り、次の宿場まで運びました。写真①は初代広重の五十三次を描いた浮世絵ですが、藤枝宿の問屋場の様子が取り上げられています。半裸の人足が馬に荷

を付けたリ、二人がかりで荷物を肩に掛けたりしており、その横で帳簿のようなものを持った男性が確認作業をしています。右端が問屋場で、帳場の床が高くなっています。これは乱暴な武士がすぐに入ってこれないように、あるいは、馬に降りやすいようにするためだったと言われています。



▲写真①東海道五十三次の内
藤枝 人馬継立 初代広重画

問屋場は宿場に一、二カ所あり、三島宿では現在の市役所中央町別館のところにありました。

問屋場にはその責任者である問屋補佐役の年寄をはじめ、帳付馬指、人足指などの人が詰めていました。

問屋は、江戸時代の初めはその地域に根を張る土豪が世襲するものが多く、時代が下るにつれて複数の有力者が交代で勤めるよ

うになったようです。背景には問屋の経済的な特権は次第に縮小し、反面、業務は多忙になり、宿場の財政も悪化していったことがあげられます。

三島宿でも当初は一つの家が長期間問屋を勤めました。寛文七年(一六六七)から三島宿全体が問屋を勤める役割を引き受け、本陣を勤めた世古氏、樋口氏などの有力者が交代で問屋となるようになりました。写真②はその経緯が記された古文書で、宿場から以前の間屋、神戸佐左衛門へ問屋屋敷などの代金として金三百七十五両などが支払われた際の証文です。



▲写真②問屋巻巻永代売渡申証文之事

企画展は六月二十九日(日)まで、問屋場の運営に関する古文書や宿場を描いた浮世絵などを中心に展示します。



ふるさとの人物ゆかりの地①

世古六太夫

芝本町の長円寺内の墓域に、ひときわ大きな一族の墓があります。江戸時代、大名や公家が宿泊する本陣を営んでいた世古家の墓です。

世古家当主の中でも江戸時代最後の当主六太夫(ろくだゆう)直道は、本陣の経営だけでなく農兵の世話係となり、幕末の動乱期に三島が戦火に巻き込まれるのを救う活躍をしました。

若い頃学問を志し自宅の一部を私塾とするなど教育への係わりも深かった六太夫は、明治時代には現在の東小学校の前身となる「開心庵(かいしんしょうしゃ)」を設立して初等教育の礎を築くなど、三島の近代化に大きく貢献しました。

長円寺の山門は世古本陣の門を移築したものといわれ、世古家代々の墓は現在もご子孫の方々が菩提を弔っています。



▲世古家の墓域(芝本町・長円寺境内)